

肺炎は「治す」から「防ぐ」へ

1 肺炎のリアル

肺炎は日本人の死因の第5位であり（2024年）、肺炎死亡者の98%は65歳以上の高齢者です。肺炎は高齢者の死亡リスクが高いだけでなく、治った後でも心血管疾患や認知症などの発症リスクが高まります。最近の研究では肺炎が「急性疾患」であると同時に、回復後も長期にわたって全身に悪影響を及ぼす「慢性疾患」の特徴も持つことが注目されてきました。すなわち肺炎は入院による体力低下が高齢者の身体機能を低下させ、肺炎をきっかけに寝たきりになったり介護施設への入所が必要になったりして健康寿命を縮めるのです。



2 がんと感染症

がん治療中の人は高齢でなくとも免疫機能に低下傾向があるため、感染症にかかりやすく重症化リスクも高まることから、感染症には特に気をつけることが大切です。実際に19〜49歳のがん患者は健康人に比べて肺炎球菌感染症の感染リスクが10倍以上も高く、その死亡率は高齢者と同じくらい高いのです。

また肺炎やインフルエンザなどにかかってがん治療が遅れると治療効果が低下するので、がん治療を予定通り進めるためにもワクチン接種はがん患者にとって大変重要となります。さらにがん患者は抗体を産生する力が弱いのでワクチンを打っても十分な予防効果が得られないことがあるため、がん患者に接する周囲の人も積極的にワクチン接種をして、がん患者の感染リスクを減らす（周囲の人から感染させない）ことも大事です。

3 新しい肺炎球菌ワクチン

肺炎球菌は日常でかかる肺炎の原因として最も多い菌であり、死亡原因菌の中で最も多いのもこの菌です（図）。しかし日本の高齢者の肺炎球菌ワクチン接種率は約40%程度であり、欧米諸国（60〜70%台）に比べて低いのが現状です。2026年4月から65歳以上の成人を対象とした肺炎球菌ワクチンの定期接種は、23価多糖体ワクチン（PPSV23／ニューモバツ

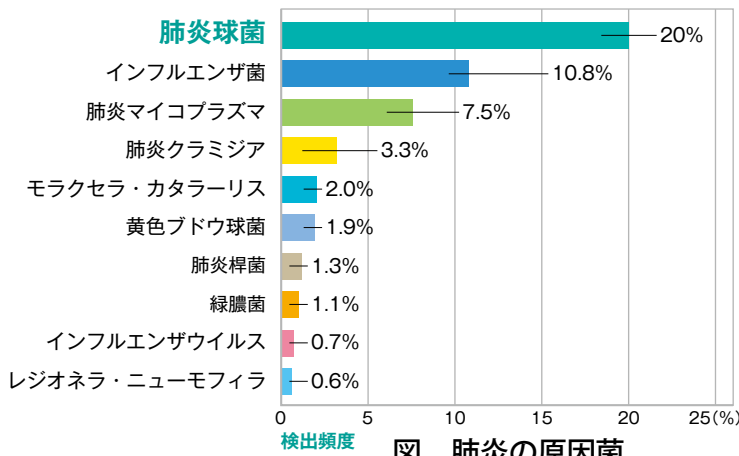


図 肺炎の原因菌

クス）から20価結合型ワクチン（PCV20／プレベナー20）に変わりました。新しいワクチン（PCV20）は重症化を防ぐ効果（血清型カバー率）が高く、免疫記憶が残るので1回の接種で効果が長期間持続するなどのメリットがあります。肺炎は高齢者の予後を左右する重大な病気であるため、「予防できる病気はしっかりと予防する」「肺炎は「治す」から「防ぐ」へ」（館田一博教授／感染症学）という意識が、地域全体の肺炎予防と個人の健康長寿の延伸につながるのです。



沼尾 利郎
ぬまおとしお

日光市生まれ。宇都宮高校、獨協医科大学卒業、米國留學を経、現任は同病院名譽院長として宇都宮セントラルクリニック等で診療。専門は呼吸器、アレルギー、スポーツ医学など。

皆様の感想や先生に書いてほしい話等ございましたら事務局までご連絡ください。

